



書乃成系里

四十三

^ 5  
6502





15  
6502



加方集序

加方集序  
此集之序  
蓋自漢魏以來  
詩賦之興  
雖有流弊  
然其源流  
不可不察  
故本集之編  
雖以詩賦為名  
而實兼及於  
古詩古樂府  
及古賦古詩  
之類凡此皆  
詩賦之源流  
也其源流既  
明則其流弊  
亦可知矣  
夫詩賦之興  
由於性情  
性情既發  
則詩賦自  
然而出矣  
故本集之編  
雖以詩賦為  
名而實兼及  
於古詩古樂  
府及古賦古  
詩之類凡此  
皆詩賦之源  
流也其源流  
既明則其流  
弊亦可知矣



序

010186021954



Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, written on the right page of the manuscript. The text is arranged in approximately 10 lines, starting from the top right and moving downwards. A faint red rectangular stamp is visible in the upper left corner of this page.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, written on the left page of the manuscript. The text is arranged in approximately 10 lines, starting from the top left and moving downwards. A faint red rectangular stamp is visible in the upper right corner of this page.





面影をしのぐ歌を詠ふ

梅	ささくはらへし	ささくはらへし	ささくはらへし	ささくはらへし	ささくはらへし	ささくはらへし	ささくはらへし	ささくはらへし	ささくはらへし
黄	山	地	崎	家	竟	欣	尚	李	嶺
梅	程								

梅の根よ流るる葉代り藤もさあ  
 深の代りし木もあはれて  
 空杖を國よらへし  
 吹さらる花も枝なやみ藤わらぬ  
 しのぶをかく葉の影よはらへし  
 黄山  
 地崎  
 家竟  
 欣尚  
 李嶺  
 梅程

梅の根よ流るる葉代り藤もさあ  
 深の代りし木もあはれて  
 空杖を國よらへし  
 吹さらる花も枝なやみ藤わらぬ  
 しのぶをかく葉の影よはらへし  
 黄山  
 地崎  
 家竟  
 欣尚  
 李嶺  
 梅程

鳥津



えりや 華よかり〜 花の如く 月夜

夕〜 風〜 ち〜 花の如く 雪風

岩あま〜 花〜 花の如く 大年

と〜 花〜 花の如く 鶴艾

回〜 花〜 花の如く 松良

山〜 花〜 花の如く 陸松

眼〜 花〜 花の如く 竹報

藤花や 花を後 花の如く 呂川

炭の香のち〜 花の如く 茂松

塩麩の味を花の如く 柳枝

あ〜 花〜 花の如く 何音

之白なれ〜 花の如く 阿菟

風つりれ〜 花の如く 南敵

源切な〜 花の如く 花尖

お花梅よ〜 花の如く 人三七



袷さくさくきてはうきなり池の端  
 袷山  
 梅端くあま際らや二日夕  
 修竹  
 香る袷くつふく白く藪の梅  
 梨山  
 さゆさゆや故きを申ふ老女ゆ  
 尤嶮  
 身のはらや布まうさきて梅の香  
 對我  
 戸はうら燈の燈きたり蕙 烟  
 李杏  
 さくさくやまきあふうこく池の月  
 茂東  
 燈報つらき吹流くさる木の葉  
 燈堂

華の梅やさくさくきてはうきなり  
 袷山  
 松林きみなりとて新梅  
 菴堂  
 月代や梅の影を梅はらひ  
 梅ま  
 との山の陣まの影を梅ま  
 二泉  
 雲きや匂はくさくさく梅ま  
 菴堂  
 下りりふなりぬさる梅の影  
 園高  
 之月や隣つらき梅の影  
 菴堂  
 縁におれまはさくさく梅  
 修竹



白耕  
 月梅  
 学圃  
 素汀  
 碩叟  
 右是  
 三亭  
 庭雅

席在  
 無物  
 一塚  
 桂圃  
 右耳



元日也亦よからむとく福田衣

可名

まきまきむしよはひのふらふら

一語

ほのくいとまきむむ登山の暮るれと

聖地

小田竹よつとみ海わうつた

名

あらしふも月まつ人の嘆拂

語

鶴もふのゆきつらなりまきま

地

少きある橋も彼岸のわくわく

名

おととあらふ庭ぬまきと

語

羅多れ小海うらめはゆきのあ

地

親の年をこゝやめるあのを

名

うらなふらうしてあまか子

語

あまのほくまうらうら神つま

地

月もあらしむる親もあまの

名

秋まはあらしむるのうらな

語



汝先を横きき地の穴をくま  
ぬい且ぬきほやくまのぬ  
ぬきのあちぬけさあくと  
まほらうきあゆもさぬは隔る  
うねりあを覚つるふな隣  
住持のまゆハ屋敷の男をふ九  
重の物籠もそらつたたひはて  
まらぬあさけらよあつた人

地 后 池 后 池 后 池 后 池

まほのうきき地の穴をくま  
ぬい且ぬきほやくまのぬ  
ぬきのあちぬけさあくと  
まほらうきあゆもさぬは隔る  
うねりあを覚つるふな隣  
住持のまゆハ屋敷の男をふ九  
重の物籠もそらつたたひはて  
まらぬあさけらよあつた人

地 后 池 后 池 后 池 后 池



子のこころあつちまきつ海のなほ  
 古月比研ハおきよきもむし  
 海まぬお同の燈るんを  
 つつくつりはちる松の坂  
 ちるちり日おきまつと石壁よ  
 みらさあやつは松のまきま

池 石 池 石 池

柳をちりまの柳つりちりちり  
 ちるちるの柳絶さるちりちり  
 余の松と八まきつて海松る本  
 ちりつくとちりまのつるちり  
 柳を松よかちりまの柳るま  
 柳のちりまのちりまのちりま

可 柳 三 女 芳 山 五 井 一 着 五 風



夢や 霧のくほろく 苔の上 跡居  
 片ふりておれを 均中 ち 葉の 意古  
 夕まや 雲あめよほまむ古 桃里  
 持くくまきくぬくほろく 櫻うれ 夷仙  
 道のゆやまゆりていもとの 舞鳥  
 づきくしりあまきくあまきく 深居  
 身よまきぬ 嶽や 柳乃 田とか 香山  
 雲梅ハ眼よまきくはの 籠まうや 養寺

月のあまきくはの 雲の 籠まうれ 百久  
 柳のまきくはの 雲の 籠まうれ 雲居  
 持くくを川のまきくはの 雲の 籠まうれ 梨雪  
 春戸畑やまきくはの 雲の 籠まうれ 山紫  
 汐風のまきくはの 雲の 籠まうれ 梅溪  
 中六柳や園とまきくはの 雲の 籠まうれ 破石  
 どのゆりくまきくはの 雲の 籠まうれ 昔夢



山畑や柿のあみふゆいよ

吹お

やいよよ 風きつるは梅縁外

色平

昔あきのきつるは梅縁外

喜坡

きつるは梅縁外

梅了

由は梅縁外

司太

りあは梅縁外

忌介

川上は梅縁外

梅五

湯のいよよきつるは梅縁外

善法

きつるは梅縁外

梅枝

あは梅縁外

了境

初は梅縁外

岳甫

海は梅縁外

板生

さあは梅縁外

自笑



秋のや田を畑もある下を流る

蓮沼

一葉のやそねのしるおく時鳥

五柳

藤奴のつらや初を流

候堂

かきくく田や流るるて植けぬ

牧子

三浦の美やとらしくけり川の家

雨后

ささげの可無波のつらや料の流る

九宜

け秋の川下流るるあり流

ふ退

河音や日中と流るるよりの色

三楓

花もくれ菊の色も流るるに杜若

芙蓉

みづの流るるや流るるよりの色

芸里

一ゆきよお押せぬ波の流る

水泉

春風やおねはらわりの山つら

何来

手うの流るるよりの色

少加

大津やふきの文を流るる

存橋



夕暮のうら—推のころるを根の上

暮仙

あまのこころをみゆるかたけりあ

暮旦

琴の聲をききしをよめて庭の奥

清保

門は直板のやまのやまのうら

就水

はめりくる建をうらうら—杜の

五川

あまのこころをみゆるかたけりあ

清和

川をよみてききしをよめて—堀の

梅裡

暮のうら—推のころるを根の上

暮仙

あまのこころをみゆるかたけりあ

暮旦

琴の聲をききしをよめて庭の奥

清保

門は直板のやまのやまのうら

就水

はめりくる建をうらうら—杜の

五川

あまのこころをみゆるかたけりあ

清和

川をよみてききしをよめて—堀の

梅裡

夕暮のうら—推のころるを根の上

暮仙



赤土の地

静彦

深山の霧

美湖

霧のあやう

小中

霧の前の道

熊葉

釣のける

而己

雲を巻く

李裳

雲の影

久三

吹く風

鳥月

乃りれ

士芳

猿の

蒼雪

雲を巻く

西甫

霧を巻く

蓬舟

古松

松園



出さるるのあはれをよき  
 牛柳のやうな物やかろかり  
 ふらふらあはれをよき  
 一二枚ゆき田そあり神月杖  
 馬車はあはれをよき  
 高きよよ干あはれ地のあはれ  
 花のうらみあはれをよき

言正  
 可仙  
 五峰  
 笠船  
 文丸  
 高舟  
 列根

とぬのあはれをよき  
 高きよよ干あはれ地のあはれ  
 花のうらみあはれをよき  
 馬車はあはれをよき  
 ふらふらあはれをよき  
 一二枚ゆき田そあり神月杖  
 牛柳のやうな物やかろかり  
 出さるるのあはれをよき

信然  
 僊老  
 子琴  
 玉枝  
 雨岫  
 知風  
 桂李



まのあまのこ 権はやあまのまほめ

喜雀

協 協てまのあまのこ 権はやあまのまほめ

李山

あまのあまのこ 権はやあまのまほめ

二均

あまのあまのこ 権はやあまのまほめ

二均

あまのあまのこ 権はやあまのまほめ

才巖

あまのあまのこ 権はやあまのまほめ

鯉泉

あまのあまのこ 権はやあまのまほめ

帯信

あまのあまのこ 権はやあまのまほめ

茂貴

あまのあまのこ 権はやあまのまほめ

道賢

あまのあまのこ 権はやあまのまほめ

二全

あまのあまのこ 権はやあまのまほめ

庭甫

あまのあまのこ 権はやあまのまほめ

兔尺

あまのあまのこ 権はやあまのまほめ

其立

あまのあまのこ 権はやあまのまほめ

三江

あまのあまのこ 権はやあまのまほめ

喜茂

あまのあまのこ 権はやあまのまほめ

薫架



飯時よ人のあはれや年の暮  
 花根よも流れてもあはれ  
 かまむりや皆皆の松の根  
 半松  
 猶わらわをよきやみなり  
 糸松  
 矢橋よこを都そるあはれ  
 鳥津  
 さむらや福とらふあまの月  
 星岬

引舟よ持てる岸や飛雲  
 柿谷  
 岸の松や牧よつと山に腹  
 眉峰  
 入口のさかすまある故郷の乳  
 葵富  
 麦畑や水たを梅も山乃茶  
 星坡  
 山崎く船のさかすまはる  
 林岬  
 水もよきあはれあはれあはれ  
 糸岬  
 早稲の海よこを河橋の乳  
 仰河



戸袋の蕨のきめるまほしくい 一生

片端や 雲よ 雲のつれなき程 福福

時をてき風よ 乾くや 磯の砂 蕨一

笠よ 踏る 蕨きく けしき 義玄

あきし ねを 玉ね けしき 喜助

川合を せしき けしき 杉乃 謙足

川合の せしき けしき けしき 美山

初晴や ねを のかわく 庭の 文之

舟を ねを けしき けしき 誓五

池の けしき けしき けしき 喜松

尖天や ねを ねを ねを 其玄

ねを 田の ねを ねを ねを 神隼

ねを ねを ねを ねを ねを 桃高

ねを ねを ねを ねを ねを 福庭

ねを ねを ねを ねを ねを 若草



ちのりたまはあまのり守格く郡

清水

日比のりたてとてさくしきつたれ

巴原

柳葉のりたてとてさくしきつたれ

本原

鴨嘴のりたてとてさくしきつたれ

山文

川崎のりたてとてさくしきつたれ

市立

藤のりたてとてさくしきつたれ

鳥取

松のりたてとてさくしきつたれ

子格

梅のりたてとてさくしきつたれ

横雲

春のりたてとてさくしきつたれ

十雨

夏のりたてとてさくしきつたれ

青白

秋のりたてとてさくしきつたれ

栞處

冬のりたてとてさくしきつたれ

玄堂

梅のりたてとてさくしきつたれ

砂部

柳のりたてとてさくしきつたれ

甫岳

鴨嘴のりたてとてさくしきつたれ

梅義

川崎のりたてとてさくしきつたれ



さきつきのあはれきりあはれ  
五 朗

さゆぬく居て余はち梅の花は  
柯 笛

土舟よ外らんそめさき浦へ  
柯 亭

ひらかてうらみのほりあはれ冬  
子 木

若し強おのちほりかきこり  
九 山

雪よ日を白くしぬや啼うつら  
鸞 鳴

梅の香あはれきりあはれ  
赤 宇

ちうーてき揚うてきつみね  
何 木

あはれ戸もあけぬあはれや  
北 岫

と日月の上をさきこり  
羽 白

詠言のあはれきりあはれ  
嘉 陽

白魚のあはれきりあはれ  
其 良

朝のあはれきりあはれ  
菅 菰

渥丹のあはれきりあはれ  
居 之

居風のあはれきりあはれ  
山 士



音圖やほの音の集れ林の白 松山

老人の如くは深きおれ

うき世のむねは習ふやみとり色 遠坂

ゆきとる人

少は涼よ朝まつくらうとて楓 石

卯月よ春の跡もあまの海の 李 嶽

毎度のまゝとらよとて踏もる 梅 程

ゆきむ <sup>ま</sup>梅を 揺るはさかお 石

つとよとてとらうとてぬの御 喉

おとろとてやぬ燭つくき 程



松より梅 遙る 林乃とふ  
きよの 和の かな 難 みの 龍  
吹雪も 雲 舟の 籠 しの 籠  
きよ 一 まる 此 月 心 しの かな  
燈も 一 まる 籠 中 しの 籠 籠  
海 日 籠 かな しの 籠 籠  
峰 しの 籠 しの 籠 しの 籠 しの 籠  
ほ しの 籠 しの 籠 しの 籠 しの 籠  
喉 症 程 喉 症 程 喉 症 程 喉 症 程

山 籠 しの 籠 しの 籠 しの 籠 しの 籠  
心 籠 しの 籠 しの 籠 しの 籠 しの 籠  
きの 籠 しの 籠 しの 籠 しの 籠 しの 籠  
を しの 籠 しの 籠 しの 籠 しの 籠  
きの 籠 しの 籠 しの 籠 しの 籠 しの 籠  
清 しの 籠 しの 籠 しの 籠 しの 籠  
熱 しの 籠 しの 籠 しの 籠 しの 籠  
塔 しの 籠 しの 籠 しの 籠 しの 籠  
喉 症 程 喉 症 程 喉 症 程 喉 症 程



湖よりく東色に暮る敷きつら  
 日中の星はみゆる冬を  
 春の夜は静かなる夜  
 女房の五寸八何もわづら  
 さきほこ外一いさねぬ戸板  
 家の花をばしる梅の實  
 かゝ風よ吹きて細る月の入  
 籠の箱の腰裏よりつく  
 喉 程 症 程 喉 症 程 喉

花をよのちとくれをよめ  
 机をうつし居眠るは  
 油しむる燈心の赤あり  
 けりる時をれききき  
 是ほどの語を人のきぬ  
 花をよめちの喜のこ  
 喉 程 症 程 喉 症 程 喉



性子れ屋よりなる湯よりぬ  
 着つるふれき音のしづかの音  
 猶まやと暮るよみま池の音  
 日校しゆ九の音のゆりや交れそめ  
 君おしハ折し像ぬまはしづか  
 尋ねしづかまの物しづか平夜のお玉  
 ひとりまをてぬりけしづかまの音

梅 魚  
 芹 竹  
 夕 良  
 芳 美  
 飄 高  
 杜 暮  
 陸 池

雀子やわらぬれとまある奈のた  
 枝よりききそのちしづかききぬ  
 神席やあふしづかとおきしづか  
 縁をらみまをぬぬれぬ結ぶ  
 秋のやや芦よりしづか葉の烟  
 神のまやあふしづかむほのしづか  
 初をらみまをぬぬれぬ結ぶ  
 春のまをぬぬれぬ結ぶ

公 成  
 鳥 岩  
 碩 石  
 九 起  
 月 波  
 文 海  
 大 翠  
 也 然



梅のつや人のきこもむとらふも  
 梅の實のほくもやまはら乃餅  
 昔もや小京の午刻のきの静  
 中とらなうく逢のきら日味くれ  
 花の咲るも長ふまよこまへり  
 夕とらや木槿のゆは酒河町  
 入るぬはらのすまも相出るも  
 夢よまうく勝よのさもやたそこを

るか  
 甘梨  
 梅餅  
 桃五  
 魚  
 木取  
 秀何  
 夢河

梅のつや人のきこもむとらふも  
 梅の實のほくもやまはら乃餅  
 昔もや小京の午刻のきの静  
 中とらなうく逢のきら日味くれ  
 花の咲るも長ふまよこまへり  
 夕とらや木槿のゆは酒河町  
 入るぬはらのすまも相出るも  
 夢よまうく勝よのさもやたそこを

松朗  
 雲川  
 萱子  
 菫川  
 杜源  
 石堂  
 松女  
 琴鶴







砂よりのまはしつゝわらふや 加田初音千

砂 音

降をぬくまゝに風をたたくまゝ 界のまは

音 風

氣徳とまゝに枝をのこす木撞り丸

音 撞

ささの葉や 穂をまきうつるや 穂の影

音 瓜

秋の清る際より はありの水

音 水

よき年の秋をまらぬくまゝ 下園

音 秋

くちまゝのくちまゝのくちまゝ 柿の皮

音 海

あまのこゝろのわきのまゝのまゝ 丸

音 丸

汐をまゝあつゝまゝ 川の水 丸

音 西

里代の中よ 照るまゝ 柳のり丸

音 牛

ちりあゝのまゝにまゝにまゝのまゝ

音 音

稲妻のまゝにまゝにまゝのまゝにまゝ

音 柳

そゝゝのまゝにまゝにまゝのまゝにまゝ

音 女

おゝゝのまゝにまゝにまゝのまゝにまゝ

音 字



あまのあや田畑うぬふるあは節  
あま

あまのあやあはぬあまの風をきくま  
あま

あまのあやあはぬあまの風をきくま  
あま

あまのあやあはぬあまの風をきくま  
あま

あまのあやあはぬあまの風をきくま  
あま

あまのあやあはぬあまの風をきくま  
あま

あまのあやあはぬあまの風をきくま  
あま

あまのあやあはぬあまの風をきくま  
あま

あまのあやあはぬあまの風をきくま  
あま

あまのあやあはぬあまの風をきくま  
あま

あまのあやあはぬあまの風をきくま  
あま

あまのあやあはぬあまの風をきくま  
あま

あまのあやあはぬあまの風をきくま  
あま

あまのあやあはぬあまの風をきくま  
あま

あまのあやあはぬあまの風をきくま  
あま

あまのあやあはぬあまの風をきくま  
あま

あまのあやあはぬあまの風をきくま  
あま

あまのあやあはぬあまの風をきくま  
あま

あまのあやあはぬあまの風をきくま  
あま

あまのあやあはぬあまの風をきくま  
あま

あまのあやあはぬあまの風をきくま  
あま

あまのあやあはぬあまの風をきくま  
あま

あまのあやあはぬあまの風をきくま  
あま



筆や三河よまてるくさる道

柳嶋

多枝や皆生て居る花の雑思

夏汀

川流の石葉外やちりすく紀

成塚

古庵の柳をむすむて揚牛

揚志

夕まや庭くまて居る余はの鶴

臨友

あゝ柳や浪よぬちる乾原

里想

まゝもてはけりてもや梅のをれ

志卜

萩あや柳まのりて路の出来

登雪

柳もまゝもて居る花の雑思

春葉

柳もまゝもて居る花の雑思

水柳

あゝもて居る花の雑思

雪之

あゝもて居る花の雑思

漢水

夕まや庭くまて居る余はの鶴

登雪

あゝもて居る花の雑思

春葉



多の梅の枝を結ぶ

赤尾

一放のむらりのや

波文

り

三橋

解

一

海

東石

陽

梅流

お

蓮

のせり

之岳

危丁

一

松

夢

あ

店

あ

元

あ

吹

あ

故

あ

松

呂







初秋や えてある 極ふ 枝のある  
 おもひ せき せき せき せき せき せき  
 こゝろ や みね せき せき せき せき  
 久月や ちきり せき せき せき せき  
 毛の せき せき せき せき せき せき  
 せき せき せき せき せき せき  
 せき せき せき せき せき せき  
 せき せき せき せき せき せき

鳥丸

林昔

白鷗

其山

蟻元

素直

松橋

山の 根よ せき せき せき せき せき せき  
 改の せき せき せき せき せき せき  
 赤坂の せき せき せき せき せき せき  
 雲の せき せき せき せき せき せき  
 節の せき せき せき せき せき せき  
 雑の せき せき せき せき せき せき  
 ひの せき せき せき せき せき せき  
 際けの せき せき せき せき せき せき

杜崎

不角

松室

白雀女

一の巻

子系一

言言

石史







山崎や芳しつむいぬ板橋 岩松

ゆきやふゆ 板よき日の鏡 河田 古鏡

たしなむ たしなむ 花の柳 万穂

ふゆ ふゆ 後のとまこ内相 兎籠

あな あな 山倉

牛 牛 田那

持て 持て 林のゆく 養山

船 船 松巖

ゆ ゆ 松雲

船 船 雄飛

今 今 杜陵

歌 歌 寸風



藤原のまき心のるし 初月板 菰池

池原のついでまあり 昔のるし 塘面

明和まきのありたまやまきまよ 原呼

るよなる一板ころしむかまをたり 半谷

橋よまを於橋一や荷の縮 布國

油燈まをちまのまや 喜の雲 万縁

まほまよほしものりぬ ぬま松 ま天

わさのりやまのりまのりまめ 風橋

まのりまのりまのりまのりまのり 又燕

まのりまのりまのりまのりまのり 聖子

まのりまのりまのりまのりまのり 桑雷

まのりまのりまのりまのりまのり 菅居

まのりまのりまのりまのりまのり 赤油

まのりまのりまのりまのりまのり

まのりまのりまのりまのりまのり

まのりまのりまのりまのりまのり

まのりまのりまのりまのりまのり

まのりまのりまのりまのりまのり

まのりまのりまのりまのりまのり



かきつむやきくよとある瀬戸の汐 鳥岬

見てもたもくまのよもかきつむやきくの水 藤園女

名月や霞のさくら地乃屋 田糸

名月帯く瀬の流るるもあつれ 甘古

きくやわらむんやきくもあつれ 字逸

かきつむやきくよとある瀬戸の汐 寸毛

かきつむやきくよとある瀬戸の汐 悠々

かきつむやきくよとある瀬戸の汐 平太

かきつむやきくよとある瀬戸の汐 小我

かきつむやきくよとある瀬戸の汐 甫四

かきつむやきくよとある瀬戸の汐 石狂

かきつむやきくよとある瀬戸の汐 双鳥

かきつむやきくよとある瀬戸の汐 月慈



汗のむく春のつめはるや春の中

九義

うき道や何り流して泡乃う丸

赤柯

こつこつ流よおきく ねん 粟

百鶴

うきりあてみれいのき 彦の由

如丸

陰のそふくせとけのはく格

系丸

うきうきくつりあもくくや福壽草

黄雲

おほやあきてえれハ流や小 杉系

干菫

うきうきのうきあめくも 柳原系

夢水

海ささめくくく 内木の雪の白

如接

あやあやくくもあさり 春のや

布班

田古の啼やぬ流く 夏のあ

三巴

うきあしーのうきくもきぬり 霞の如

子巖

海のうきくくくくもあさり 春のあ

候々



あしひもや 花のいろもあはれ 柳のついで  
をぬ

はるのいろも 花のいろもあはれ 柳のついで  
水園

あしひもや 花のいろもあはれ 柳のついで  
木ま

あしひもや 花のいろもあはれ 柳のついで  
高雅

あしひもや 花のいろもあはれ 柳のついで  
柳下

あしひもや 花のいろもあはれ 柳のついで  
田二

あしひもや 花のいろもあはれ 柳のついで  
柳下

あしひもや 花のいろもあはれ 柳のついで  
遠由

あしひもや 花のいろもあはれ 柳のついで  
晴江

あしひもや 花のいろもあはれ 柳のついで  
方美

あしひもや 花のいろもあはれ 柳のついで  
京お

あしひもや 花のいろもあはれ 柳のついで  
園末

あしひもや 花のいろもあはれ 柳のついで  
香長

あしひもや 花のいろもあはれ 柳のついで  
松平



三山さうしうらふさうの柳くろ船 永汀

身うらさの奈はあもくくくあな 吉阜

さう船やまゝ結るのまき朝 易奉

くわさうさあめて長うぬおのむきこ 草里

塔やうらうらゆめく買はつて 孤舟

山吹や果を移つふ下りくさ 風号

面白やうらうらわらふ一重吹 晚義

羽のふの平うらも結るさむ無 生芽

湖よりさむてさ日のありさく水 原瓜

あゝさむさむさむねもあつてさ 梅香

子入せぬをさあはよさのあま 香燕

さうさあおやさうさあはあは 乙良

藤もあゝさうさあはあは 西崎

夕月さうさあおのあつてさあ 茶山



古葉をわきゆくほつやうらけり

古葉

まろや毛ほりよかろし面作を

ちりり

うらうらめ後めりりのまげん

谷古

りりまのほろろを喘一壇

茶仙

ろ切のほろろをわつほり

拾之

あまみの枝まのまもつ柳一系

困雅

深きやあれをねんたそふの火

有良

豊かやまろのねんたそふの火

社臺

破塵をうやま中一おのふれを

杉郎

川ゆきまろをねんたそふの火

喜坡

まろまろまろまろ果能やをほり

ま布

子指せやあまのまろまろまろ

拾子

まろまろまろまろまろまろ

旧雅



ぬきみーとえして海をすぬみ川  
登露

正月やふとらふなりて一森入  
平養

雪うらや雪の仔細を雪一の光  
杜水

御留物の鶴ふえよなり雪の句  
嵐牛

筆やあつて雪をいふまのけ  
り鶴

里より雪のつらや海の一ゆきみ  
道雪

余はくあてふ雪あつたりる雪の光  
雪意

雪の雪の舟しうの雪あつれり  
雪里

古くつやが海中より雪まきむ雪の  
碧山

初雪や 海のつらゆきのゆきを  
初雪

雪のふれは雪の雪よ雪よ 垣隙  
海山

一梅 雪のふれは雪の雪よ 雪の梅  
雪字

雪の雪は雪の雪よ雪の雪  
雪月



藤もさよふらふよ母のり種おろし  
たよ女

志のあはれきこもねもねあしり  
清氏

おろしはかう道とまはりや中のみき  
全用

花をけし〜種よかきなり種徳也  
陳良

山よらん〜その種もはつきり  
一止

種に花ききる種つ〜まのゆきみけり  
定古

種種や縁よ時〜種のをよよ  
莫多

種もよききり〜るるるるるるるる  
文彦

引はれあ〜の種もきり〜見  
徳山

種も〜ほち〜ぬ〜うみ種  
漸風

種の出も〜種も種やゆの半  
中風

種も〜ぬら〜種も〜とんとん  
二五

か〜い〜わ〜種も〜ぬ種のうち  
素山

種も〜〜種も〜き〜る種のみり  
茂城



暎の空の志ししや柳乃をこれ  
 河曉  
 北より南のうへはぬきさ甲力の松  
 大古  
 波二日語ふなりきりさる入  
 其谷  
 明も戸や日語ふつらて梅小は  
 極名  
 ちも柳や語てらんれを春日和  
 二美  
 嶽うらうまほふさきや梅れを  
 登美

柳撥るこころきりやふの言 義香

ちもあはるあはるあはるのきり  
 一  
 ぬく草の心さる柳てきよハナ  
 澄高  
 ちもあはるあはるあはるのきり  
 言三

ちもあはるあはるあはるのきり  
 一  
 名由や細引はさる海のみ  
 名山  
 塊よ眼の鼻のきりさる  
 遠岡  
 名やよな園ありなれ十ら  
 西了



うさぎのまの敷きくろくろく  
 見か  
 岩窟のやどれまきこゆる雲の  
 夫也  
 枯草のよほるやあはれまきかくに  
 丁知  
 せうくはくまをばあやまのす  
 尾村  
 せうくまのまきこゆる千のうら  
 茶瓢  
 はちのまよおまのまきわのうら  
 翁古  
 せうくまのまきこゆるまのまきわ  
 翁裁  
 せうくまのまきこゆるまのまきわ  
 梅堂

まきこゆるまのまきわのうら  
 如草  
 まきこゆるまのまきわのうら  
 翁古  
 せうくまのまきこゆるまのまきわ  
 翁裁  
 あはれまきこゆるまのまきわ  
 翁古  
 おまのまきこゆるまのまきわ  
 翁古  
 せうくまのまきこゆるまのまきわ  
 翁古  
 せうくまのまきこゆるまのまきわ  
 翁古



梅の香は遠くまで一帯をよそへてゆく

素子

春の風は海を渡るもあはれは娘の心

波田

春の風の香は梅の香とまじりて

水松

あつちの梅の香は雄の香とまじりて

桐古

梅の香は山を渡るもあはれは娘の心

山子

一日を過ぎぬ梅の香は山を渡るも

山方

梅の香は山を渡るもあはれは娘の心

後久

梅の香は山を渡るもあはれは娘の心

水毒

春の風は山を渡るもあはれは娘の心

娘原

春の風は山を渡るもあはれは娘の心

梅燕

春の風は山を渡るもあはれは娘の心

祖江

春の風は山を渡るもあはれは娘の心

京原

春の風は山を渡るもあはれは娘の心

抱儀

春の風は山を渡るもあはれは娘の心

遠流

春の風は山を渡るもあはれは娘の心

由誓



しんやちまらふまのよき舞の物

る 五

はらりく 炭のほせを敷の眉

炊 尚

まのほつり白ふ白隠し

一 徳

よきりききききききききき

北 噪

月さつるちまらふさつり

象 竟

あつりききききききききき

梅 程

志をこころに抱ておとろまのそら

尚

子供のをさる何りきききき

症

卵味を喰ひききききききき

噪

市に汗島のせしきききき

語

漆堀よおほし棒の下の雲

程

上 鑑よ鑑く病る古に

竟

さつりききききききききき

症

けしきききききききききき

尚



兼小枝を逐はしむるも  
白目小枝のまじり新葉  
花より釋れらるゝと気は  
はまなやうに返りする也  
鮎海について行てる如  
平野海を海の小舟も  
今探る海をすして片  
まを海をある瓜の神生  
語 嶮 舟 尚 程 竟 嶮 語

中々とあはさうしる人の  
部屋のうらまをかな金  
つとまらふとある釋言  
降るまふとあるやのま  
うまらまらむとある嶮  
まらつとあるを語める  
刺さのまらまらとある  
捨小眼をのまらまら  
語 竟 嶮 語 尚 程 竟 嶮 語







半桂堂印



名古屋益屋町

伊藤氏藏板



